

【意思決定支援あるいは共同決定とは何か？－その2/2】

そこで今度は、言葉にならない意思表出行動を、言語化していく能力について考えてみることにしましょう。これは、支援者側の問題になります。

「オシッコに誘って動かない」くらいのことなら、誰でもこの意思表出行動に秘められた気持ちの一つくらいは言語化できます。一番簡単に誰もが推測できる気持ちは、「今はオシッコが出たくない」です。または「オシッコが出たいのか出たくないのかが、重い知的障がいのために分からない」です。しかし、人の気持ちは、そんな簡単ではありません。同じ「動かない」状況であっても、その理由は様々に推測することができます。

「あなたには誘ってもらいたくない」なんていう時もあるでしょう、「今は、面白いテレビを見ているから行きたくない」なんていう時もあるでしょう、「今、行こうと思っていたのにうるさいなあ」なんていう時もあるでしょう。さらに根本的なところで「あなたは私のことをわかってくれないから、私はあなたのいうことをききたくない」なんてこともあるでしょう。まだまだあります。「さっき行ったばかりじゃない」なんてこともあるだろうし「今は眠いなあ、面倒臭いなあ」なんて時もあるでしょう。まだまだありますよ。「熱がある」「下痢をしている」というような体調が悪い時には、オシッコどころではないかもしれません。「さっき違う職員に誘われたばかりです」なんて言えば最低の支援状況ですね。

つまり、問われているのは、重い知的障がいのある方々の意思表出能力ではなくて、支援者側の意思受信能力なのです。意思表出行動を受け止める受信機（チューナー）の能力が問われているのです。高性能な広帯域のチューナーを持ち、さらに個々に異なる意思表出行動の背景にある意思に即座にチューニングできる能力が意思決定支援には必要とされています。どんなに重い知的障がいの方であっても、必ず相談の答えを伝えてくれてい

ます。ただその答えにチューニングを合わせることができる支援者が少な過ぎるのです。

だから、サービス利用計画作成時などに「ニーズを聞いて下さい」と言われた時に「しゃべることができない人はどうしたらいいんですか？」などという自分のチューナーの無能力を棚に上げて堂々と質問するような方が後を絶たないのです。

これが意思決定支援の4つ目の要素です。それは、意思表出行動の裏に潜む本当の気持ちにチューニングできる能力です。このチューニング能力は、支援者が自分の行動を深く自己分析する練習によって鍛え上げることができます。

私たちが行っている双方向のコミュニケーションは、単なる情報のやりとりではありません。さらにその相手が知的障がいの方であるとしたらさらに情報のやりとりという側面は小さくなります。情報処理するという能力に障がいがあるのが知的障がいの特性であるからです。

やりとりされるのは、情報の裏にある意味なのです。その意味のやりとりこそが共感の基礎になります。

「あ！イヌ！」という言葉が発した時に伝えたいのは、「ジス イズ ザ ドッグ」という情報ではなく「かわいいね」とか「うちにいるよ」という情緒や周辺状況なのです。まさか皆さんは答えていませんよね。「イヌだね、よくわかったね」なんて学校のテストの答え合わせのようなことを…。

<まとめ>

自己決定支援の要素とは？

前回その1で述べられていること

- ①なんでも相談するという姿勢－意思表出支援
- ②相談すれば必ず答えを返す力があると信じる姿勢
- ③意思表出行動を否定せずに言語化すること－意思形成支援

今回その2で述べられること

- ④意思表出行動の言語化する能力（チューニング能力）